

1月5日

「わたしの家は祈りの家」

ルカ 19:41-46

武安 宏樹 牧師

「宮清め」は四福音書全て登場する記事ですが、本書は最も描写が簡潔で、必然的に「わたしの家は祈りの家でなければならない」浮き彫りになります。医者ルカは整った文体かつ最も多い字数で満遍なく、救いを主題とします。彼の関心事のテーマの一つが祈りであり、主イエスの祈りが9つ登場のうち、7つが本書固有で、受洗に際し祈り、押し迫る群衆を前に荒野に退いて祈り、十二弟子任命前に徹夜で祈り、ペテロの信仰告白前に祈り、変貌山で祈り、派遣から帰った弟子が悪霊追放に喜んでいと、諫めた末に天を見上げ祈り、そしてクライマックスは22章のゲツセマネ、23章の十字架で内容が記され、最期の叫びに至るまで主は重要な場面において、事ある毎に祈っています。「宮清め」での主の怒りは商売自体ではなく、外庭を占領して金儲けと搾取が、公然と行われて、異邦人が締め出され礼拝が妨げられる腐った現状にでした。パウロは「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」(ロマ 12:1)心新たにしないと神の御心が見出せないと言います。主の救いの眼は女性や子どもや不遇な人々ら、外の世界に注がれていました。

旧約時代の神殿礼拝は廃止され、キリストの贖いの業によって私たちは、どのように御からだと霊的につながるかが大事ですが、宮清めの出来事は、「祈りの家」なる教会の在り方に関わり、周辺の人々への視線が祈りの動機で、教会を形成します。それは自分の心の深い部分を献げることから始まります。各人に価値観があり得意な分野や人があれば逆もある。自分の感覚に合った働きならば楽しくできますが、自分の器はあまり広がりません。その反対に、違和感を抱くような働きや人だと、あの人が悪いとかやり方が違うといった、さばきとは言わずとも答を出す誘惑に駆られます。教会は悔い改めた信者の集まりですから黒白つけ得ることは多くはなく、それは言うべきことなのか、言わない方がよいのか祈らされます。人に判断を迫られても判らないことや、愛を求められても欠けることがあり、それでも無力を認めて祈ることに優る、祝福は無いのではないか。皆さんの内に異邦人を迎える広場はありますか。神から与えられる恵みを流し出していなかったら、それは悔い改めましょう。新しい年ならびに年度総括の1月。広い心で祈る者へと変えられましょう。

1月12日

「老人の祈り」

ルカ 2:25-38

武安 宏樹 牧師

救い主を待ち望んでいたシメオンとアンナの、喜びと預言的な祈りを通し、信仰者の姿を学びます。前章ではエリサベツとマリアとザカリヤそれぞれが、自分たちの身の上に預言が成就したことを、「私」を主語にして恐れながらも、賛歌として受け止めましたが、シメオンとアンナは「神」を主語としています。私たちの祈りは通常は一人称で、「あなた&私〜You&I」の個人的関係を基に、呼びかけます。御前で「私の」罪を告白し、「私の」一日のスケジューリングが御心に適うように、「私の」家族の救い、「私の」仕事、「私の」教会のためなど、私たちが属する団体や地域との関係性から、祈りが深められ、広げられます。主イエスが教えられた主の祈りは、複数形で共同体的ですが「私」一人称です。ダビデが部下の妻との姦淫罪を示され、御前に赦しを求める祈りにいくつも、「私」が登場します(詩51:)。神から逃げも隠れも出来ず依りすがることしか、自分の生きる道は無いとの自覚です。「私」から始まる祈りは青臭いのでなく、靈的成熟に向かわせませんが、以上は一言でいえば現役世代の祈りではないか。主が私に託された、とりなすべき大事な人々がいるから熱心に祈れるのです。

ところが明らかに現役から退いた、老年のシメオンとアンナは何を祈るか。もちろん自分のことも祈るでしょうが、「イスラエルが慰められること」を、それは自分の国や民族のためというより、旧約聖書で主の民に対する約束が、捕囚で亡国の民と化し、中間時代に預言は沈黙し、帝国の圧政に苦しみつつ、明るい未来が見えず救い主の約束など誰もが忘れた時代に、この期に及んで、靈の目を忍耐強く開き続けて、祈りの灯を絶やさない驚くべき信仰者がいた。自分たちの思いは横に置き、御言葉の約束の実現が老い先短い彼らの全てで、当時の世の中が祭司階級が金儲け、律法学者が自分たちに都合のよい解釈に、民は政治的復興に希望を見出すばかりの中で、純粋な信仰者が残されたのか、人間的熱心を超えた神の選びを、25~27節の「聖霊」三連発から思われます。赤子を抱いた時に彼の人生がここに結実し、もう死んでいいと確信に包まれ、至福の瞬間を味わいつつ、主が異邦人まで世界を造り変え無残な死を迎える、戦慄をも語ります。年輪を刻み洞察に満ちた老境の祈りが、マリアのごとき若い世代の心を備えさせて、来るべきリバイバルへと進む群れとなるのです。

1月19日

「退いて祈る」

ルカ 5:12-16

武安 宏樹 牧師

忙しい毎日の中で、主との交わりの時間の確保が信仰の成長につながって、霊的なバランスを崩したり独善に陥ることを防いで、充電の時となります。毎日のデボーションは「退いて祈る」基本で、三度の食事同様に地道な交わり無ければ必ず疲れが出てきます。霊的な健康は肉体の健康維持と似ています。ところが日ごとに霊肉が健やかなら万全かという、そういうわけではなく、30代と50代では代謝が異なるので、年1回は隅々まで診てもらうのが宜しい。車は部品と油を替えれば半永久的に保ちますが、人は体の各部分が統一的に構成されて肉体&精神&霊が不可分なので、全体的な定期的点検が必要です。創造主は人は6日働いて1日休み、農地は6年耕したら1年休ませなさいと安息で心身のオーバーホールを行い、神の備えた活力の回復を命じています。本書で主イエスは要所要所で祈りに退きます。「退」に引退&退職&敗退など、良いイメージが無いかも知れませんが、主イエスは福音宣教の第一線から、下りたのではなく一時的なトリート(=退修)で、この英語は①軍隊の退却②隠れ家&避難所&修養③(カトリックの)黙想などに、用いられています。

4章では弟子スカウトの前、5章では律法学者たちが主の面前に現れる前、6章では十二弟子任命の前、つまり重要事項決定や戦いの激しくなる前には、最たるものが十字架の前にゲツセマネで、主イエスは引きこもり祈りました。「ちょっと山に…」と離れる主が何をしに行くか、弟子に察してほしいもの。集中的に祈ることが目的で退くことは手段ですが、時間と場所を取り分けて、祈りに集中しやすくなります。教会や祈禱院、外部の修養会や聖会も良し。せつかく取り分けた時間ですから、聖霊に探られ、動機が間違っていないか、信仰の姿勢が歪んでいないか、3年5年単位で振り返ることで恵みが見える。16節を紐解くと「おられた」継続時制のbe動詞に、分詞「退く」「祈る」がかかり、「退いて」は能動態ですが「祈って」は中態で、「祈り祈らされ」努力だけでなく、聖霊によって祈りに追いやられる様で、悔い改めと赦しと解放をいただいて、以前の訳に「よく(=often)」とあるように、主はたびたび祈りに退きました。「寂しいところ」は「荒野」を意味し、イスラエルの民の罪の結果に見えますが、回り道で主の恵みを悟り、ひいては「一歩下がって三歩進む」現実となります。

1月26日

「登って祈る」

ルカ 9:28-36

武安 宏樹 牧師

変貌山の記事は三福音書共通ですが、ペテロが神社3つ造るとの珍回答に、マルコの「恐怖に打たれていた」理由に対し、ルカは「分かっていなかった」と、知性と信仰の不足に帰し、他にも彼らに気付いてほしい解答を示唆しながら、本書のみ「祈るため」登山の目的が記され、祈りに教育的な意図が見られます。「山」はノアの箱舟(アララテ山)/イサク奉獻(モリヤ)/モーセへの啓示と律法(ホレブ)/ソロモン神殿(モリヤ)/エリヤの戦い(カルメル山)等頻出します。

一つ目にアブラハムが愛息イサクを伴ったように、主イエスは弟子たちを、同伴しました。十字架予告直後とはいえ彼らは主が犠牲にと思わず、まして、後に自分たちも殉教と想像だにせず、自分の栄達しか頭にありませんでした。主は山を登りながら犠牲はわたしだ、そしてあなたも同様に屠られるのだと、背中で語ります。主に従う中で身を焼かれる経験をしたことはありますか。「義のために迫害されている者」(マ 5:23)のため、天の御国は開かれています。

二つ目にモーセがシナイ山で主と会見し、祈りで海が開かれ敵から救われ、律法により神と人の間で祭司の役目を果たす、祈りと御言葉の関係があります。後にペテロの最初の説教で3000人が救われ(使 2:)、耳障りよいことは語らず、旧約の引用と、「このイエスを、あなたがたは殺した」悔い改めの迫りでした。彼らに按手されたステパノなど、殺せるものなら殺してみよとばかり(使 7:)、彼の血の種子がサウロの回心に結実し、祈りと救いと聖霊の爆発力を見ます。心に割礼を受け、悔い改めて主と共に山を登る者に天の窓は開かれています。

三つ目にエリヤがカルメル山で悪の軍勢と対決したように、弟子たちにも、霊の戦いがあります。エリヤは勝利の後に鬱状態に陥り休息と食事で回復後、モーセと同じくシナイ山に登って、神と会見して新たな使命を与えられます。祈っても束の間良くなったように見えて、すぐに逆戻りし失望と疲れが襲うことも多々ありますが、主は目の前の戦いの彼方に何か見せてくださいます。悪魔との戦いはパウロが詳述しますが(1^o 6:)見えない戦いはいろいろあり、私たちは心広く献身と悔い改めと天の祝福を仰ぎ、信仰の山を登りましょう。

2月2日

「神の安息①」

箴言 14:10

武安 宏樹 牧師

①神が人の心を造られた

「神はまた、人の心に永遠を与えられた」(伝 3:11) 私たちは自分の心の内部をどれくらい知り、同様に他人の心について理解していると言えるでしょうか。「神はご自身のかたちとして創造された」(創 1:27) この「かたち」に人の精神も含まれます。人生経験や学識を重ねても肉親でも人は完全に理解できません。でも自分で自分が分からず人と意思疎通できなければ、なんと孤独なことか。「喜びであろうと苦しみであろうと、人は孤独であることが教えられている。人の心の深みはだれにも分からず、ただ神だけがご存じである」(新聖書注解) 被造物である人間は神と離れた生き方は、虚無で自己中心で異常なのです。

②人の心に住む罪

「愚か者は心の中で、『神はいない』と言う。」(詩 14:1) 自分を造られたのに、神はいないと言うのも、神以上に大事な「神々」が存在するのも結局同じです。造り主に背を向けて身も心も他人も傷つける罪を犯しています。それよりも、もっと悪いのは主なる神と同じ位置に自分を置き、自分が神になることです。ヨブと三友人は真摯に対話を重ねるも理解し合えず、後に神から叱責を受け、真の自分を見出すまで謙遜になれませんでした。ヨブの以前の信仰は完璧で、されど喜びに欠けていた。試練の後は悔い改めと和解から祝福が倍増します。心に苦味(マラ)あればヨブの如く、主との新しい関係に変えられる機会です。

③心を分かち合う

「喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。」(町 12:15) この章の冒頭に「からだ」を献げなさいと、ここに心も含まれます。「ほかの者はあずかれない。」裏を返せば主イエスと信者は喜びにあずかれる。双方から掘り進むトンネル工事最後の爆破開通の如く、分かり合う瞬間です。「あずかる」は保証人となる意(ヨブ 17:3/詩 119:122)。世の中の表面的関係や、不健全な共依存関係は出てきません。主イエスが自分の内や他人との関係に、120%入っていただき聖霊が染み通り、喜びと悲しみを共有し合えるのです。キリストの肢体に連なるゆえに、「分からないけど分かる」と励ませるのです。

2月9日

「神の安息②」

ヘブル4:1-4

武安 宏樹 牧師

創造7日目は「夕があり、朝があった。第7日。」と閉じられていないことで、今に至るまで安息は継続しています。この安息を自分のものとするために、原文で1節文頭は「恐れようではありませんか!」動詞一語で強調しています。3章では荒野40年における失敗と、繰り返し神を怒らせたことを真剣に考え、同じ災いが降りかからないよう恐れよと。御言葉が語られても頑なに拒んで、敵が巨大で怖いからと聞く耳持たず、モーセの世代はみな滅んでしまいます。次のヨシュア世代でカナンに入れましたが、信じる者に用意された素晴らしい安息を彼らが反抗して受け取ろうとしなかったことを、著者は嘆いています。斥候隊の報告を聞いて「神の約束通り素晴らしい地で、敵に必ず勝利できる」か、「私たちの目には自分たちがバツタのように見えたし、そう見えただろう」か。両者の反応の違いは明らかで、主がどのような方で何をなすことが出来るか、主を忘れ自分本位の人間的憶測で、不利益を被るのを避けるのを選び取るか。信仰の有無で安息は決まります。果して私たちの安息はどこにあるでしょう。カナンの地か日曜の教会か天の御国か、以上3つとも形は違えど存在します。

「信じた私たちは安息に入る」(3節)から「信じた」は一回完結の決心を表す過去時制、「入る」は継続的に「入り続けている」現在時制で能動と受動の間の、中態なので自分で入るだけでなく、安息の中に(=into)入れられる意味です。キリスト者=「安息人」。だからと言って仕事しない、人を助けないではなく、地上で主の似姿に変えられる聖化の歩みにおいて、ここまで働いたけれども、ここからは手を休めて主に委ねると、現在進行形で神の安息を学ばされます。斥候隊の報告を聞いた民は、動かなければならなかった時に動こうとせず、さらに悪いことにその罪悪感から、動くなと言われた時に攻め込もうとして、敗走しました。自分の思いで行動を決めることがあまりにも多いことから、「恐れる心を持つ」と。「恐れ」には人間的恐れと神への恐れの意味もあります。私たちのデポーションは観察&黙想までよくやりますが、適用をどう行うか。御霊の平安を手掛かりに、キリストがくださった安息の答え合わせをします。焦ったり喜怒哀楽に任せたり余計なことを言ったり行ったり、人間的な情で動きがちですが、直前に安息を受ける間があるかが成長に大きく関わります。

2月16日

「登って祈る」

ヘブル4:11-13

武安 宏樹 牧師

①みことばに努める（11節）

原文は1～11節でひと段落ですが、内容は安息の流れを受けつつ12～13節「神のことば」の切迫性と結びつき、文頭「努めようではありませんか」勧告で、1節文頭の神への恐れと本節の人間的な努力の、双方とも信仰に不可欠です。「神のことば」を絶えず求めつつ、己を人格的に振り返りながら前に進みます。救い主が来られ聖書を手にし聖霊を戴く私たちは、御国に邁進することです。終わりの戦い激しく落伍する者や異端の嵐に、疲れを覚える時もありますが、努力して重荷を捨て主を見上げ、「忍耐をもって走り続け」（12:1）ることです。

②生けるみことば（12節）

原文は「生きていて」が文頭で強調され、以降「力があり、刺し貫き、見分け」。私たちは神のことばを味わいながら、無力でナアナアで死にかけた霊に陥り、悔い改めを拒む肉で自分を守っていませんか。「御言葉は選ばれた者に力を現わす。自己の真の認識によって彼らがへりくだり、キリストの恵みに助けを求めるためである。軽い突き傷や打ち傷を感じるのではなく、骨の髄までえぐられて突き通されなければならない。永遠の死という思いに打ちひしがれて、自己に死ぬことを学ぶためである。」(カウァン)内側を斬られ肉を粉々に砕かれ混沌とした霊性が分けられ御霊に満たしたまえと祈り、神が「分ける」ことで、自分のことが「分かる」のです。何が混乱か分からない方はご相談ください。パウロは語ります。「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」(Iハ° 6:17)

③最後に裸にされ（13節）

そんなに努めなくても斬られなくても、良いではないかと思われる向きも、全ての信者も未信者も避けられないのは、みな死後さばきを受けることです。「さらけ出す」レスリング用語で相手の喉をつかんで動きを取れなくする意。人はある期間だけ神から逃げられても、最後には神に捕らえられ直面します。人の視線は避けられても神の視線は避けられない。私たちは神の前に裸です。信者は未信者以上に採点されます。私たちは救われてみことばに努めて生き、責任の重い民。いつ上げられても澄み切った心で、生き様を現わしましょう。

2月23日

「恵みの御座に近づこう」

ヘブル 4:14-16

武安 宏樹 牧師

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません」(15節) 私たちの中で弱さを感じない人がいるでしょうか。病気の弱さがあります。かつて健康で元気だった人が弱るのを見るのは辛いことで、長い闘病生活も大変ですが、逆にあまりに急な召され方は整理がつかず悔いが残るものです。心の病はもっと深刻です。自分は誰からも理解されていないのではないか、家族や仲間迷惑をかけているのではないか、自分の生きる意味は何なのか。思考の牢獄に閉じ込められて、食欲も睡眠も取れずに窮地に追い込まれます。そんな時こそ教会に行くべきと知りつつ、どうしても起きれず足が向かない。けれども以上のような弱さを持ち合わせず、心身とも社会生活に支障もない、そういう人々の方が世には多いかもしれませんが、弱さを抱えている以前に、弱さを自覚して、聖なる神と汚れた自分の格差に「我こそ罪人の頭なり！」と、身も心も財産も献げて謙遜に主に仕えようとする人もいます。富める青年は、完全な生き方を志すも、主イエスの返答は「貧しき者に施せ」につまずきます。彼のその後は不明ですが、主は彼に強さよりも弱さを求めておられました。

皆さんの心の井戸はどれほど深いでしょう。聖霊は最深部に臨在されます。心の果てしない深さの闇は、「もろもろの天を通られた、神の子イエス」(14節)と結びつきます。弱さの扉を開けるのは恐ろしく知られたくない過去があり、ライバルへの嫉妬が仲間の前で陰口と化し、施し様のない自己愛があります。そのような愚かさを恥じて涙を持って悔いる祈りを、幾度繰り返したことが。しかしそこに主は居られます。腐敗臭を放つ所こそ主が向かう十字架でした。情けないみっともない祈りの中に、主の愛といやしを極限まで受けるならば、主は以前よりもっと深い所に来てくださり、赦しと解放といやしで包みます。「我々の場合は罪が総攻撃をかける前に崩れてしまう。しかしイエスはあらゆる種類の試練を受けながらもなお、しっかりと立っておられた」(バーレー) 傷だらけの主が優しい笑みで深みに立っておられる。私たちは天だけ見ると、弱さを忘れて足元をすくわれま。大祭司イエスは「同情」くださる方です。「近づこうではありませんか」(16節) 大胆に近づくの躊躇していませんか。弱さをごまかして大きく見せていませんか。主は弱さを持つ人が大好きです。

3月2日

「優しく接すること」

ヘブル5:1-4

武安 宏樹 牧師

私たちは憐れみ深い大祭司イエスを先に考えがちですが、聖なる神の前に、自らの罪深さを認め、無能な私たちのために御子がいのちを投げ出された、救いの恵みによって生かされている順番が大事で、御言葉が心の奥深くまで刺し貫かれるのに比例して、うわべではなく主イエスの優しさが現されます。「同情する」(4:15)と「優しく接する」(2節)は、協会訳では共に「思いやる」で、前者は主イエスの人に対する完全な同情、後者は大祭司の人に対する接し方。皆さんは目の前で苦しんでいる人に対して、「わかりますよ、同情します。」と、言えるでしょうか。自分が苦しむ時にこの言葉をかけられたらどうでしょう。自分と似た苦しみを経験した人であれば、わかってあげたい力になりたいと、かりに相談を求められたらなおさら願い、細心の配慮で寄り添おうとします。それでうまくいったのでしょうか。そうでなければ何が原因だったのでしょうか。心が通じたようでそうでなく、かえって踏み込み過ぎて痛みを与えることも。あの時ああすればと悔いつつ、愛も知恵も忍耐も無い自分の無力を覚えつつ、全知全能の御方以外「同情」は成し得ず、聖霊の意思疎通に委ねるばかりです。

「優しく接する」原語は悲しみと無関心の両極端を避けたちょうど中間の、正しい感情「中庸」(伝7:16-18)の意です。「これはすばらしい語で、苛立たず、迷惑がらず忍耐して人に接する能力、愚かな人、察しの悪い人、何度聞いても理解できない人に対して苛立ちを抑える能力で、また他人の過ちを怒ったり、悔やんだりせず、その日のうちに気持ちを整理し優しく力強く気持ちを察し、忍耐してその人を正しい道に連れ戻し、神に導き返す態度である。」(パーカー)調和の取れた「ほどほど」が良いのですが、これほど難しい境地ありません。語り過ぎず黙り過ぎない、内で祈り過ぎず外で奉仕し過ぎない、その塩梅は、どのように見出せるのでしょうか。一つ目に失態を犯したアロンが大祭司に召されたように、自分の力の限界を認めて彼方に聖霊の働きを見ることです。偏らず頑張り過ぎず「7割」を目指し、剛速球よりも丁寧に四隅をつく投球で、余計な力を抜きます。二つ目にチームワークで、必ずしも自分ばかりでなく、第三者に委ねることで解決することは多く、各人が賜った賜物を持ち寄って、協力すると違う視点が与えられて謙虚になり、教会に同情の実が咲くのです。

3月9日

「叫び声と涙をもって」

ヘブル 5:5-10

武安 宏樹 牧師

7節から見ていきます。「肉体をもって生きている間」直訳「肉体の日々」。キリストが神秘的存在とかプラスアルファの知恵など、人間離れした霊との、惑わしを退けるため、罪は犯しませんでしたが私たちと同じ肉体を持たれたことが、非常に重要と語ります。真の神であることや真の人であることを否定したり、父より御子が下位とする異端は、二性一人格教理から退けられてきましたが、人であることの意義について、私たちはピンとこないのではないのでしょうか。著者は肉体を持たれたキリストが、私たち同様に恐れと不安に直面しながら、「大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ」る姿から学ぶだけでなく、私たちの人生のこととして深く思いを巡らせてほしいと、願っているのです。同じ語でパウロは「肉」が新しい霊の働きを妨げる、古い人間性に用いるので、悪い印象があるかもしれませんが、「今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです」(ガラ2:20-21) 罪や古い自分と戦いながら聖化される消極面に加え、主イエスのゲツセマネにおける迫真の祈りは、信仰による肉体の究極でした。

与えられた肉体を100%神に向けて献げきるのが、主イエスの敬虔さです。肉体を持たれたからこそ、人間同様に「大きな叫び声と涙をもって」祈られた。だから私たちも地上で罪と肉の戦いがある間は、同様に祈らねばなりません。主に比べて敬虔さの欠けた私たちは、自分の願いばかり一生懸命祈りますが、不純な祈りでも投げやりなのと、喧しく涙を流して祈るのでは違ってきます。自分の祈りが不純か気づかない愚か者だからこそ、心の底から感情を注いで祈ると主が肉体で経験された痛み苦しみが迫ります。聖霊体験とも言えます。「『祈りに三つの段階がある。祈りは静かである。叫びは声を上げる。涙はその上を越える』どんな人でも悲しみを経験しない人はいない。イエス・キリストは苦しきもだえる涙の祈りを知っておられた」(パーカー)感動するだけでなく、祈りの自己中心を悔い改めることが大事です。苦しみを体裁よく人の意見や自分の悟りでまとめるのではなく、ヨブの如くぶつかって追い求めることです。古い皮袋にしがみつきのではなく、建物同様私たちもリフォームされましょう。その信仰の中に大祭司が立っておられます。主の前に真実でありましょう。